

## 座 談 会

アルベルト・メルッチ教授,「ヤイユーカラの森」を訪れ,  
アイヌ文化に触れる

日 時 1994 年 9 月 10 日 (土)

午後 8 時～11 時

場 所 「ヤイユーカラの森」事務局  
(札幌市南区常盤 4 条 2 丁目 19-32)

出席者	秋辺 得平 (ヤイユーカラの森)	田澤 守 (ヤイユーカラの森)
	伊藤 守 (札幌学院大学)	床田 和隆 (ヤイユーカラの森)
	井上 芳保 (札幌学院大学)	新原 道信 (横浜市立大学)
	大國 充彦 (札幌学院大学)	宮内 洋 (北海道大学大学院)
	計良 光範 (ヤイユーカラの森)	アルベルト・メルッチ (ミラノ大学)
	計良 智子 (ヤイユーカラの森)	山下 輝昭 (ヤイユーカラの森)
	小林 甫 (北海道大学)	山本えり子 (北海道教育大学)
	櫻井 義秀 (北海道大学)	(50 音順)

注)「新原」とあるのは、メルッチ氏の発言の通訳ではないと思われる部分。

「計良」とあるのは、全て計良光範氏のこと。智子氏の発言はなかった。

また、山下氏も結局、発言しなかった。

## 1 メルッチ教授と「ヤイユーカラの森」メンバーの自己紹介

計良：お話といっても何から話せばいいのかわからないというのが正直なところです。私個人のことを話せばいいのか、秋辺さんのことか、或いはアイヌの歴史を話せばいいのか、現状を話せばいいのか。

井上：歴史と現状のお話を一般的なところからお願いできればと思いますが……。

新原：あらかじめ送っていただいた英文の資料に彼は目を通しており、すでに概略的な知識は持っていると思うんです。ですから、或る程度「ヤイユーカラの森」の活動について話していただいて、その上で後から今どのようなことを特に聞きたいかといったことをメルッチさんから述べてもらってははどうでしょう。

計良：誰に何を聞くかということもありますので、ここにいる人間の自己紹介をとりあえずしておいたほうがよろしいんじゃないでしょうか。

井上：それもそうですね。それではまず、計良さんからお願い致します。

計良：ここに住んでいる計良と申します。ここは私の自宅であると同時に、秋辺さんがこれからお話しになると思いますけど、秋辺さんが代表をされている「ヤイユーカラの森」という団体の事務局と作業場も兼用しています。それでそちらにいるのが私の連れ合いの智子です。「ヤイユーカラの森」そのものは全国に会員がいる組織なんですけども、実際にはこの事務局で私たち二人が中心になって日常的な活動をサポートをしています。つまり主に私が事務的なことをやり、彼女はアイヌ

の文化を教え、広める活動をしています。具体的には料理とか、刺繍の講習会を開催しています。ちょうどあそこにある（壁にかかっている織物を指さす）のも彼女がつくったものですけど、ああいうふうな伝統的な文化を自分でやると同時に伝える仕事をやっております。「ヤイユーカラの森」そのものの活動が今どういう意味があるのかということはこの後の話の中で段々出てくると思いますのでとりあえず自己紹介はそれくらいにしておきます。

**新原：**あの二つ方法があると思います。一つは彼が英語で話す方法、もう一つはイタリア語で話してもらって、私が拙いのですが翻訳するという方法。どちらが……。

**秋辺：**後者の方がいいというか、それしか方法がないと思います。

**新原：**わかりました。

**メルッチ：**とにかくまず簡単な自己紹介をさせていただきます。アルベルト・メルッチと申します。イタリアにミラノ大学という大きな大学があるのですが、そのミラノ大学の社会学部の教授をしています。ここ20年ほど自分の専門として「新しい社会運動」と言われるような、様々な社会運動の研究をずっとして参りました。これまで、主に先進国と言われるような国の社会運動をずっと研究して参りました。またアメリカやカナダやラテンアメリカそしてもちろんのこと、ヨーロッパでいろいろな大学で教えて参りました。ですが、日本に来たのは今回が全く初めてです。

そして、この数年とりわけ関心を持っておりますのは様々な先住民による社会運動です。例えば昨年の12月にニューヨークで開かれました国際先住民のかなり大きな会議に参加致しました。そこで例えば、ホピというアメリカ・インディアン代表などと知り合う機会を得ました。そのような関心がありますので、今日こうして皆さんにお会いすることを非常に喜ばしく、そして誇りに思っております。

ます。

ですから最近の自分の問題関心から致しても、ぜひアイヌの様々なことについて教えていただきたいというふうに思っております。

例えばその彼ら、その先住民会議で知り合ったアメリカの先住民の例などとは比べましても、歴史の中でアイヌの皆さんというのは非常に厳しい同化を強いられた歴史があったと私は理解しております。そして、こうして様々な社会運動に関して興味・関心を持って勉強してきた私がということだけではないんですが、こうした先住民と言われるような人たちが自分をもう一度新しく自分が何者であるかを定義し直すことを通して、様々な文化を再考し、自らの存在を確信していくというような運動が非常に重要になってきているのではないかと思っております。

しかし、残念なことに私は一昨日、日本に着いたばかりでして、そして初めて送っていただいたいくつかの英文資料を見せていただいていた一生懸命いろんなことを知ろうと思っておりますが、なかなかこんな短期間の中で全部がわかるはずがないとも思っております。

ただ二つほど今の時点でお聞きしたいと思うことがございます。一つは異文化のレベルで、文化的なものとしてこれからどのような要求したり、実現したいというふうにお考えいらっしゃるのかという質問です。もう一つは、今後例えば様々な諸権利ですとか、政治的なレベルで同じようにどんなことをお考えになり、そして今後どうそれを実現していこうと考えていらっしゃるのかという質問です。

**新原：**少しその質問が出てきた理由を補足させていただきます。今このような質問をさせていただいたのは、彼が例えば昨年国際先住民会議で知り合った人たちなんかの場合は実際に一定の土地があって、そこではある程度は政治的な自治ですとか様々な文化的なもの

の保護が制度的に保障されているということがあって、そしてそのある程度自分たちのコミュニティ、共同体みたいなものが残っているという形で文化が守られ、そして継承しているのを見てきたんですが、そういうものと比べた場合、アイヌの皆さんの場合には非常に条件が厳しく感じられました。

今日、たまたま案内していただいて平取の博物館に行ってきたんですが、当初は彼はそこにはまだアイヌの皆さんが御自分たちの集落をつくって、ちょうど Native American のように御自分たちの生活を維持してると考えていたのですが、行ってみて実際にはそうではない、そこまで日本の同化というのは非常に厳しく進められたんだなと強く感じたというふうに車の中で話しておりました。

ですから今の質問は非常に厳しい条件の中での、文化的なもの政治的なものをどのように考えていらっしゃるのかをお聞きしたかったということだと思います。

計良：この後、そんな話になっていけばいいってことですか。

新原：はい、そうです。

秋辺：私は秋辺得平と申します。井上先生とはこの前知り合ったばかりで、メルッチ先生が来られるっていうことを伺いまして、会ってはどうかということだったんです。それで今日はそういうことが実現したということです。だから井上先生だけは知り合いですけど、あとは皆さん初めての方ばかりです。それで私はこの「ヤイユーカラの森」という組織の代表者ですけど、その他にも「北海道ウタリ協会」というアイヌの一番大きな組織がありますけど、そこの理事であり、教育文化部会長でもあります。

今日は私と計良さんともう二人仲間が来ますので紹介したいと思います。こちら田沢さん、そして山下さん。お二人とも「ヤイユーカラの森」の専門委員です。お二人とも北海道アイヌでなくてサハリンの樺太アイヌで

す。本当は自己紹介してもらった方がいいんですけど、とりあえず。

アルベルト・メルッチさんに北海道にお越しいただいたことを心から歓迎したいと思います。ようこそいらっしゃいました。私の兄家族がミラノに二年ほど住んでいたことがあります。でも私は行ったことがない。今日はどのくらいの時間を考えていますか。私は明日の朝まででも構いませんが……。 (笑)

井上：いやあ。やはり夜はおやすみになりたいでしょうし……

小林：遅刻してきたのに言うのは恥ずかしいんですけど、7時頃に着いて3時間ぐらいあればいいと思ってはいたんですが……。僕は小樽に住んでいまして、僕とメルッチさんとは川沿のグリーンホテルに泊まることになっています。ただ他の方は札幌市内で車もありますから何時までということはないですが。

(中略)

## 2 日本の社会学研究者たちの自己紹介

小林：こちらも自己紹介させていただきます。新原さんからまずどうぞ。

新原：どうもはじめまして。私、新原と申します。私もメルッチ先生同様、社会運動、そして民族問題というのを専門に勉強しておりました。とりわけイタリアのサルジニアという島にもしばらく留学して住んでおりました。そこにはサルジニア語という言葉が話す人たちがおりまして、イタリアの中でも非常に特殊な所です。その島と沖縄が非常に似たような歴史的な経緯を持っておりますので、ずっと沖縄の運動に関わったり、あるいは沖縄のことを勉強したりしながら、同時にサルジニアのことを勉強しております。ですから言語や文化や歴史の問題というようなことでずっとやってきました。それと高田馬場に新しくできたあのアイヌ料理の店というのに行ってきました……。

**秋辺：**私も行きました。けど伝統的なアイヌ料理はほとんど出ていませんね。

**新原：**そうですね。雰囲気だけです。沖縄の出身の人たちと皆で一緒にやっていますけど。

**小林：**小林です。大学出てから深川で高校の教師してました。もともと育ったのが、親父が江戸っ子で、おふくろが津軽なんですけど、神奈川に住んで、僕の友人たちに朝鮮人だとかフィリピン人とかいった人たちがいっぱいいました。クラスの中にも在日朝鮮人の子供がいました。ずっと民族問題に関心を持っていたんですが、北大に入って、大学出て、高校に行き、また北大に戻ってきたんですけど、北大の社会学というのはアイヌ民族に対して大変悪いことをやってきているってことを聞きまして、実際……悪いことをやっているってことがわかって、しばらく手を出しちゃいけないと思っていたんです。また同じことをやりかねませんので実はこういう所に来るのは怖くて怖くてしょうがないんです。しかし逃げてばかりもいられませんので、よく勉強してみたいと思っています。子供の教育の問題とか、教育の裏にある様々な生活環境のことだとか、といったことで少しでもやることがありましたら勉強することも含めて、これから長いこと御一緒させていただけたらと思っています。よろしくお願いします。

**井上：**僕は札幌学院大学社会情報学部に通っています。井上と申します。差別の問題に関して非常に興味を持って勉強しております。もともと生まれは北海道なんですけれども、しばらく「内地」に行っておりまして戻ってきて、札幌周辺で生活するようになって四年目なんですけど、北海道に来て生活するようになってアイヌの問題について自分はこれまであまり知らなかったなということを学生とゼミなんかで話していても感じています。

去年から「ヤイユーカラの森」の夏のキャ

ンプに参加させていただきまして、そのときに計良さん夫妻と田沢さんにはお会いしましたし、秋辺さんとは先日の白老での学習会のとき知り合いました。そのキャンプの中で、例えばよもぎの葉っぱを生活の中にうまく取り入れているとか、生き物の存在を非常に大切にするとか、決して自然に対して無駄な事をしないと、そういった近代人が忘れているような価値観というのをアイヌの文化の中にたくさん見出すことができるように思っています。これから多くのものをさらに学びとらせていただこうと思っているところです。

**大國：**札幌学院大学の大國と申します。専門は人間関係論というやや抽象度の高いところで、人と人との関わりってというのはどういうふうにネットワークというか、関わりの積み重ねの中でできてるのか、またその中で人というのはどういうふうにつくられてくるのか、ということを考えております。

生まれも育ちも東京でして、今年の4月から北海道に参りました。向こうにいる頃はアイヌの問題っていうのがあるんだと知識としては知ってはいたわけです。それでこちらに来て、こちらに生活するようになってから時に考えたことっていうのは、いわばアイヌの問題というのは僕から見たらどういう問いの出しかたをすればそれが自分の問いになるのかなということを、そこのところを今ずっと考えているし、それは専門の方のいろんな問題ともつながってくるんだと思うわけです。だけど、まだどういう問いの出しかたをしたらいいかかわらないし、自分の問題として何かまだ言えるほどのものを知ってもしないというのが今のところです。それで今は今日初めて来たこういう雰囲気のところの様子を非常に興味深く思っています。

**山本：**北海道教育大学岩見沢校の山本です。キャンプに今年から参加して、いろんな話を聞いています。私の大学では何年か前から、

アイヌ語、アイヌ文化に関する科目を開設して力を入れてきています。科学研究費があたって、教材研究の中にどういうふうにそれを入れていけるかという議論をしています。しかし、いろんな考えの人がいまして、一つの考え方に反対するのはなかなか大変という雰囲気になってきたり、いろんな問題なんかも出てきています。そういうことがあっていろんな人の考え方を聞いて自分で判断できなきゃと思っています。それで「ヤイユーカーの森」のキャンプに参加して、直にアイヌの人の話を聞いて、初めて声を聞けたと思います。大学にいと何かペーパーを通してしか、或る研究者の話を或る立場からしか聞けない。それで判断してしまうと凄く怖いことになると自分でも思っています。それでそうした機会になればと思い、今回の企画にも参加させていただきました。名前言ったっけ、山本です。(笑)

**伊藤：**井上さんと同じ札幌学院大学社会情報学部の伊藤といいます。私、出身は東北の山形です。大学もそれから仕事もずっと東京でやってきまして、四年前に北海道に来たということです。ずっと勉強してきましたのはコミュニケーション論、あるいはメディア論ということで、マスコミの影響とか、新聞・テレビの機能ということについて専門的にやってきています。東京にいる時には山形が出身だということもあったんですが、山形にフィリピンの花嫁が日本の中でも非常にたくさん来てるということで、わずか半年ぐらいですけどそこに行っているいろんな調査をやったりしてきました。

それから実は教育文化にも関心があって、特にお母さんたちを中心にした教育問題を語るサークルなんかに参加させてもらって、そこでもいくつか勉強させていただいたということです。北海道に来てから四年たつんですが、直接アイヌの方とお話する機会が全くなくなって、今日はメルッチさんと同じようにゼ

ひいい機会と考えていろいろな話を聞きたいというふうに思って来ました。どうかよろしくお願いします。

**宮内：**僕だけ学生なんですけど、北海道大学の大学院で勉強をしています宮内と申します。自己紹介なので言いますと、ウリ文化研究会のメンバーでして、在日朝鮮人の皆さんと一緒にもう二年、三年になるんですが、タングを叩いています。男のメンバーは二人しかいないんですけども、もうひとかたの方は都合であまり来られなくなって、僕だけでオモニたち、お母さんの中で一人だけでいろいろ「宮内君だめじゃない」とか言われて練習をやっているんですけど。

僕は国籍は日本でして、生まれた所は大阪の在日朝鮮人の人たちが多く住んでいる所です。そして、もう少し隣にいわゆる被差別部落もあります。そういう地域に住んでいたんですけど、それでまあ、きれいごとじゃない本当の喧嘩だとか小さい頃からずっとあったりしました。結構うちの兄貴と一緒に、初めてこううちとけたというような。それでもどこまでそうなのかもわかりませんが、まあ、いろんな近所関係だとか葛藤だとかがあって、僕はまだ全然ほんとにわからないんですけど、それをずっと積み重ねています。その中で在日の方とかが一緒にお話して下さって、一緒に飲んだりだとか、お話は伺ったりはしているんですけど。

これからの僕自身の専門としてはやはりいろんな秩序を持った人たち、自分自身と違う秩序を持った人たちと、出会った時に自分が変わっていくということがテーマですね。そのいわゆる僕と、いわゆる日本人って何だっという話なんですけど、日本人側の方が変わっていく、変わり方が自分自身の問題としても考えていきたいと思っています。それはずっと自分のライフワークというか社会的なテーマだと思って、今はウリ文化研究会で太鼓を叩いています。よろしくお願いします。

桜井：私は桜井と申します。北海道大学の文学部で社会学を講義しております。私は北海道に来て十二、三年になるんですけども、アイヌの文化に関しては本をちらっと読んだぐらいでほとんどともに勉強しておりません。この前も連れてきてもらったんですけど、これをきっかけに勉強させていただきたいと思っております。

私、関心を持っていますのは人間が生活していく中で自分らしさとかあるいは自分とは何だろうかということ、直接口で語られることでなくても、例えば、いろんな伝統的な文化であるとか、そういうものの中で語られているのだなということです。それと村にいる人たちが町に出て行った時だとか、或いは社会が新しくなっていく中でどういうふうにその自分たちの殻を近代化しながら、同時に「自分たちらしさ」というのを保てるか、或いは伝統がどういうふうに持続していくのかという、そういうことにも関心を持っています。そのような研究を最近タイ国に行っておりまして、そこの農村の文化がどういうふうに変化していくのかということを通して見ていきたいと思っています。本当は北海道でもやればいいんでしょうけど、どういうわけか南方に関心を持っております。よろしくお願いします。

### 3 「ヤイユーカラの森」という組織の活動について

秋辺：あと田沢さんと山下さん。それと智子さんは。

計良：おいおいと喋るそうです。

秋辺：大変おもしろいユニークな先生方たちが多いんですけど、アルベルト・メルッチさんとはどのような関係でいらっしゃいますか。

小林：一橋大学がメルッチさんを東京に呼ばれたんです。その後一橋大学の社会学部の学部長から、伊藤さんや僕のところへメルッ

チさんは日本の多くの人たちと会いたいと思っているんで、北海道に呼んでももらえないかという話がありました。僕らはメルッチさんの本を読んでいましたから、どういう人かっていうことは見当がついていたんで、ぜひ直に会ってお話したいということで、呼びたいと申し出ました。それで、せっかく来ていただくんでしたら、一緒の場所に行ってお話したいという議論をしまして、結局、山本さんとか井上さんから紹介していただいたアイヌの人たちとぜひ一緒に話すべきじゃないかということになりました。それは皆がそう思っていました。これから先に二歩も三歩も進んで行くための一歩をちゃんとここで踏みきろうということで、メルッチさんにはそのことを決めた後で伝えただけなんですけど、快く承知して今日は同行して下さいました。本当は事前によく連絡とっておくべきだったと思います。そういう経過です。

秋辺：メルッチさんが日本に来て、さらに北海道に足を伸ばして、一つはアイヌのことに関心をお持ちになるということ、大変私たちアイヌにとっては嬉しいことです。

アイヌと和人との関係の歴史の中で、この120年のことです。日本が明治政府という政治形態を持つようになった時に、それまでの封建社会に見切りをつけたわけです。アイヌ的なとかアジア的の未開社会からヨーロッパ的に先進社会に向かおうというその時代から、アイヌと和人の関係というのは非常に大きく変わるんですね。その時に明治政府はアイヌ民族にどういう関心を寄せていたかというと、あんまり関心を寄せなかったんですね。非常に邪魔な存在というか、願わくばこの世から消え去ってほしい人たちというぐらいにしか思っていなかったと思うんですね。そういう時に日本が開国したんで欧米人がたくさん視察に来た。事実上スパイ的な人もたくさんいたと思いますけど、そういう人たちがア

アイヌのことを国に報告して、それによってアイヌの存在も欧米によく知れ渡ったんですね。今日、メルッチさんはたくさんのお弟子さんを連れてきたようなので、明治以後の日本に来た外国人がアイヌや日本をどう見たのか、或いは日本の学問はどうだったのかなどという点については、後で僕らに教えて下さい。

私に言わせるとメルッチさんがおいでになった今も、120年経過してはいるけれども状況はまあ当時と本質的には変わっていないということです。とにかく基本的には明治期と何も変わっていない。つまり、北海道大学にしろ札幌学院大学にしろ日本の大学はアイヌ問題はなるべく避けて通ろうということがあったわけです。そういう意味でも今日、たくさんの方が関心を持ってここに来られたということは、メルッチさんのおかげで誠にありがたいことですし、貴重なことです。

本論に入りますけど、メルッチさんから最初に二つの御質問をいただきましたのでそれにお答えします。一つはアイヌ民族が文化的に何を求めているのか、あるいは何を實現していこうとしているのかという問いですけど、まあ、私たちの「ヤユウカラの森」がこういう活動する、そして或いは「北海道ウタリ協会」という組織、その他にも小さいくつかの組織がありますけど、その組織単位です、組織ごとになんかことを考えているのかなということを話した方が一番いいと思います。個人的にはいろんな思いがありますから、個人の思いでじゃなくてね、組織としてどう思い、やっているのかということを話してみたいと思います。

今、私はこうして日本語を喋っています。このこと自体がもうすでに私自身は母なる言葉である、母語であるアイヌ語をもはや話すことができない状況にあることを示しています。ですから私の中にある発想の根源ってのは、アイヌ語にではなくて、日本語にあ

るわけです。私はじゃあアイヌなのか日本人なのかということになるわけですけど、しかし私は明確にそのアイデンティティーはアイヌ民族にあります。なぜかっていうと言葉は失ってもこういう伝統的な民具や、楽器もそうですし、民族衣装も持っていますけど、そういうものを自分たちの先祖の道具の文化として、そこにルーツを持っている人間ですから。或いはアイヌ語もやはりそうしたものです。だから今こういうものを通して、或いは歴史的に表されたその歴史的事実を振り返りながら、自分たちはアイヌ民族としてどうあるべきかということ、今、手探りで見直そうと、何かそういうことを見てみたいという状況にあります。

まあ一般的には、和人、日本人というのは、特に北海道にいる人は、北海道民というのは、アイヌといったって、そんなものは存在しないんじゃないか、混血もしてるし、すっかり日本人に同化した生活をしてるんだから、今さらアイヌなんていう必要はないんじゃないかというふうに思う方が大変多いんですね。そう言われれば、うーんそうだよと、それにぐらっときて、やっぱり俺自身も日本人でいた方がいいのかなという人が多い。アイヌ自身でもね。

例えば、計良さんにしても、奥さんはアイヌだけど計良さんは日本人。私はアイヌだけど私のかみさんは日本人だし、田沢さん、山下さん、彼ら二人の奥さんも日本人です。つまりアイヌと日本人というのは特に結婚、婚姻という関係を通して混血していったという現実があって、それがもうアイヌってのはないんじゃないかっていうその話を裏付けていく、正当化していくような社会的な意識があって非常に困っているわけです。まあしかしアイヌ民族とかアイヌ文化とかいうものはこれは血が薄くなったから消えればいいという問題じゃないので、それはやっぱり保持しなくちゃいけない。

そういう意味で今「北海道ウタリ協会」とか「ヤイユカラの森」とかいろんなアイヌの組織がありますが、それぞれ皆アイヌ文化あるいはアイヌの歴史というものについて正面から見据えて、自分たちのアイデンティティーはそこにあるということを取り戻そうという作業をしているわけです。ですから文化的には何を求めているかという問いには二つの面があると思います。

一つはその具体的にこういう民具をつくる技術、その文化として目に見える物的な文化を伝承していくという作業です。二つ目はやっぱり精神的なもので、どう生きる考え方を持っていくかという、考え方を取り戻すことです。この文化的に何を求めているか、どう実現したいのかという二つの大まかな行動の目標というものを実現するためには、政治的な要求が必要になってきます。それはアイヌ民族の側が、アイヌの側がどうして欲しい、こうして欲しいと要求すること、そのことを日本政府は待ってたわけです。あなたがたはどうして欲しいのか、何が欲しいのか、まあ、なるべく日本政府は聞きたくはないんでしょうけれどもね。なるべく要求して欲しくはないと思っているようだけれども、やっぱりそれは要求しないといけなから、アイヌの側がそういうことを要求するという自己主張それ自身が政治的な部分での要求なんです。

第一の御質問の文化的なレベルで何を必要としているのかということには、当然二つ目の質問にある政治的なレベルで何を求めているかということにそのまま行くわけだけれども、もう一つ政治的なレベルで要求するポイントがあるんですね。一つはその文化的なことだったわけですが、もう一つ大事なことは日常の現状の生活、別なアイヌの伝統的な文化を取り戻すとかそういうことじゃなくて、日常的に日本国籍を持つ日本国民としての普通の暮らしが差別によって非常に低いレベルにあるわけなんです。これを引き上げるため

に日常の生活のレベルを引き上げるための、日常的な生活の要求があるわけです。それが政治的な要求の二つ目としてあるわけなんです。

ですからアイヌ民族としての民族の文化、或いは伝統、そういうものをきちんと自分たちの手に取り戻したいというのは、当然どの人間集団の文化であっても、それは失ってはならないわけですね。それは当然世界中のどんな民族でもどんな集団の文化であってもそれは大切にされて当たり前のわけですから、そういう意味では当たり前の要求をしようとしています。日常の生活の、一般の国民との生活に差があることのその差を埋めることを要求しているのも、これは人間として生きる上で当然の権利ですから、それは要求していかなければいけない。

それで、最後になりますけれども、この「ヤイユカラの森」という組織というのはそういった要求するだけの組織ではもちろんなくって、それももちろん一面としてありますけど、主としては会員がアイヌであっても和人であっても外国人であっても、ここに来てアイヌの文化について学びたい、あるいはアイヌの文化について触れたい、或いはそれを伝承したいという具体的な個人個人のそういう要求を実現していくという組織なんです。つまり、ここは政治的な要求するためだけの道具の組織ではないということです。大変大まかですけど、そういうことで一応の答えにさせて下さい。

#### 4 先住民族、少数民族、言語的少数派の存在

メルッチ：今お聞きしたことに関して、また二つ程お聞きしたい。一つは数を数える上で難しいと思いますが、今アイヌ語を話せる方はどれくらいいらっしゃるのでしょうか。

秋辺：正確にはわかりません。けど、おおむねこのくらいかなぐらいはわかります。なぜ



かといいます…….

メルッチ：大体どれくらい.

秋辺：数十人.

計良：日本語のように自分の意思なり情緒なりをアイヌ語で伝えることができる人の数はっていうと、何十人もいないと思います。ただ、一生懸命後から学んだり、学び直したり、覚えたりして、作文しながらアイヌ語を伝えるという人はかなりの数がいますよ.

新原：彼が聞きたかったのはもう一度勉強し直すことによって自分で学ぶという形態でしか話せる人は存在しないのかということです。あまり気にしなくても話せるという人はいらっしゃるんでしょうか.

計良：非常に少ないですね。その人たちでも日常は日本語です.

メルッチ：二番目の質問は今の質問と関係しておりますが、皆さんよりもさらにお年を召した方の場合に様々な伝統的な文化、特に精神的なものです。そういったものをそのままお持ちの方はいらっしゃるのでしょうか.

計良：おりますが、自分自身の家族に伝えていくという作業のできる環境の人はほとんどいません.

秋辺：研究者や外部の人が、伝統的な儀式を司る長老たちがいたらそこにマイクを持って収録に来ます。聞き出しに来ます。そうすると家族はなるべくそういう人には来て欲しくないという。そういう状況のケースが大変多いわけです。ただ、少しですが、この国際先住民年も含めて国際的にも国内的にもアイヌ民族に対しての関心を持つ人は内外ともに増えていまして、それはいい方向に出ています。つまりマス・メディアを通じて報道されていますので、一般の人のアイヌを見る目が少しずつ変わってきています。だから、いいことなんだなというふうに一般の人はとるようになりました。ついこの間までは、アイヌのことといえば、観光地のことだとか、なるべく触らないで避けたほうがいいとか、非常に暗

い背景だったのが、今少し明るくなりつつあります.

井上：もう少し他の方にもお話していただければ……。 (しばし沈黙)

新原：国連が主催したんだそうですが、彼が参加した昨年の12月にニューヨークで行われた会議に、ホピの代表の方が来ていらっしゃって、様々な自分たちの環境について様々な訴えを行ったんだそうです。もちろん、そのホピの方たち以外にもいろいろなアメリカ大陸のいろんな場所からの方たちがいらっしゃって、彼はその場所に合わせたんだそうです.

秋辺：二、三日前にね、テレビでやってましたよ。ホピのリザベーション。懐かしい所が出てましたよ。あれは私が行ったのと同じ場所。いやあ、懐かしかった.

計良：井上さんから、メルッチ先生はイタリア北部の先住民あるいは少数民族のことについて社会学者として研究されているということ、ちらっと聞いたように思うんですが、そうなんですか.

メルッチ：最初に先住民族の問題と少数民族、言語的な少数派というのは少し分けて考えないかと思っておりますので、その違いについてまずうまくお話をするために説明したいと思います。言語から見たイタリアの中での少数派というのは少なくとも五つから六つ数えることができます。アブステダニという場所がありまして、この辺りの人たちはフランス語を話す人たちのグループが、この北の境（新原さん持参の伊和辞典のカヴァー裏のイタリアの地図を指差しながら話す）に、フランス語圏との境に住んでおります。この辺りには高原ドイツ語といわれるドイツ語を話す人たちが住んでおります.

それからラテン語じゃなくてラディーノ語という言葉がありまして、これはスイスや山岳民族の言葉でドイツ語に非常に近い言葉なんです。ドイツ語以外にラディーノ語を話

す人たちがいます。この辺りですね。それからフデューディ・ベネツィア・ジュリア地方と言うのですが、フデューディ語という言葉話す人たちが住んでいます。また、この辺りにはアルバニア語を話す人たちがいます。ギリシア正教を信じて、そしてギリシア語を話す人たちの村がいくつかこの長靴の底の方にいます。それからあとシチリアにも、シチリア方言というのはかなりイタリア語の中でも強い方言ですので、このシチリア方言を話す人たちというのも、明らかに言葉で区別されます。

サルジニア、この辺りは完全にスペイン語やほとんどラテン語を母語とした、ポルトガル語、スペイン語、フランス語、イタリア語と同じ起源を持つサルジニア語を話す人たちがこの島に住んでいます。北海道よりちょっと小さいぐらいの島で、160万人で人口密度は北海道とほとんど同じです。ところがこの島の中にまた少数の言語を話す人たちがいます。カタローニア、この前バルセロナオリンピックの開かれたカタローニアの言語を話す人たちが、アルゲーロという港町があるんですが、その人たちがこのアルゲーロという町に住んでいます。ですから、アルゲーロの人たちは、サルジニア語とカタローニア語とイタリア語の三つを話すことができます。

それだけじゃなくてイタリア語の場合、非常にその地方ごとに強い方言が話されています。それはもともと地域ごとの歴史の違い、例えば都市国家であったとか、公国であったとか、いろんな歴史的なローマ帝国以来の古い歴史の違いによって地域ごとにそれぞれの文化歴史があって、ですからそこから出てくる言葉の違いというのが大きくあります。ですから少数言語としてまとめられるグループに重なる形で、イタリアの中の地域ごとの違いというのがあります。

結局、お話ししたことは、かなり歴史的な起源の違いがあると思います。少なくともそ

の地域ごとの違いというのが問題になるようになったのは、1861年にイタリアが統一されてから生じてきました。問題はこの地域ごとの言葉の違いだと思います。それよりももっと古い起源を持つのはギリシア語やアルバニア語やドイツ語、フランス語、そしてサルジニア語といったような言葉の問題だと思います。

実際には1948年に制定された法律があったんですが、その法律が現実に応用されたのは1970年で、地域ごとの、州ごとのかなりの自治が認められるようになりました。で、ここでたまたまイタリアの例をお話したんですが、ちょうど現在イタリアは20の州に分かれていまして、そのうちで例えばシチリアとかサルジニアとかフデューディ・ベネツィア・ジュリアとかあります。それとこのドイツ語圏は、特別州といって別の自治が認められています。こんなそれぞれの独自の歴史や文化を持った人たちが、その自分たちの伝統についてどういうふうに関心したり、考えたりするかという問題は、別にイタリアの問題だけではなく非常に一般的な問題であると思います。

ですから、そのような例えば「私は何者であるのか」とか「我々は何者であるのか」という問いに遡れば、それはこうしたその非常に同化の圧力や統合が進む、とりわけいわゆる進んだ社会、先進社会といわれるようなところで生きている人たちにとっては、皆さんの持たれている様々な疑問や考えていらっしゃることに非常につながりの深い問題であるというふうに考えております。

ただ、とりわけ皆さんの場合、アイヌ民族の問題というのはもちろんより強い統合の圧力というか同化しろといわれてきた歴史がありますから、もちろん一般化はできない面はありますけど、今お話ししたようなことは私の最も関心の持っている問題、哲学的な非常に原理的な問題として考えています。

計良：それだけ違う言葉を持った人々がそれぞれの地域に住んで、大雑把に言うと言葉が違くと民族が違みたい言い方がございますよね。そういう意味での民族性というのはそれぞれまだ守っているんだと考えるんですけど、そうなんでしょうか。

メルッチ：おそらくイタリアの場合には長く多様な文化の混在を認めてきたといえます。イタリア人の中で非常に強い民族的な差別、黒人に対しても含めて非常に強い差別が行われた時期というのは唯一ムッソリーニのファシズムの時代だけです。それ以外はほとんどありません。イタリアは或る程度文化的に多様なものを認めるということで1861年以来、何とか今日まで国を維持してきました。またそこまでしないと維持できない程の違いがあって、それは中央政府が必ずしも強くなかったからだとも言えます。

そのような歴史から当然来るものだと思いますけど、そのイタリア人の中で大体60%のイタリア人は非常に強い方言、標準イタリア語でない方言を日常的に話しています。

計良：ありがとうございます。少し頭の中が整理されました。

## 5 アイヌである事実を隠すという生き方

秋辺：学校教育とかマスメディアを通しての標準的イタリア語っていうのは、ほとんどの人は聞き分けたり、話したりすることはできるわけですか。

メルッチ：もちろん、だから使い分けることが可能です。

秋辺：バイリンガルがいっぱいいるということですね。

メルッチ：ただ、もちろん今まで幸いにしてイタリアの中でそうやって自分たちの言葉の話すというような文化が残ってきたんですが、それでも今の非常にマスメディアの強い影響の中で次の世代にこうした伝統が引き継

がれるかっていうことは、別にこれはイタリアだけの問題ではないんですが、やっぱりかなり大きな危険が伴っています。ですからイタリアの中にもそれぞれの地域ごとにたくさん「ウタリ協会」やこの「ヤイユーカラの森」のような団体がありまして、そこではそれぞれのいろいろな文化や伝統を守っている、あるいはもう一度勉強し直そうというようなことを一生懸命勉強しております。

秋辺：日本だって同じです。日本では、アイヌ語は全く違う言語だけど、日本語の中でも津軽弁もあれば、鹿児島弁もあります。琉球ではウチナグチを使うし。

小林：僕の母親が津軽出身でして、言葉が津軽弁でして一生それを恥じていました。つまり、普通の日本語を喋れないので買い物に行って馬鹿にされてね。

秋辺：それは明治政府の方言撲滅政策のせいですね。

計良：すいません新原さん、一人遅れて参加した人がいるので。

床田：床田と言います。この「ヤイユーカラの森」の子供の専門委員をやっております。夏には、子供たちと一緒にキャンプをしまして非常に楽しい仕事をやらしていただいています。仕事はですね、フォトグラファーなんですけど、今月末にはメキシコに取材に行く予定です。その目的はチアパス州ってメキシコにあるところなんですけど、武装蜂起がありまして、その時はね、すごくショックだったですね。なぜ平和なメキシコで彼らが武器を持たなければいけなかったのか。そのことを取材したいと思っています。その時にできれば秋辺代表のメッセージを持っていきたいと思っています。

小林：ちょっと違った質問でもいいですか。秋辺さんの話の中で政治的要求をする最後の理由ですね、日常の現実的生活の問題、日本国籍を持った日本人として当然実現すべきなのにそうはなってない。そこら辺のことにつ

いていろんな差別があるっておっしゃったように聞きましたが、そこをもう少し詳しく喋っていただけますか。例えば、仕事の面でとか具体的に。実は、今日の昼間にメルッチさんに質問されたんです。お前の大学にはアイヌの学生何人いるのかとか。山本さんの所には一人いましたか。

**山本：**自分でアイヌだと名乗っているのは一人です。

**井上：**名乗っていない人を含めたらもっといるんじゃないですか。

**小林：**名乗ってる人は僕のところにはいないからゼロだろうとしか言えないんですけど、事実はわかりません。例えば、これはアイヌだけじゃなくて、在日朝鮮人でもそうなんですけど、日常生活を支える職業面での差別があって、従って高い学費を出せないとかいった問題が今でもあると思うんですよね。それは新しい文化を習得する能力があるなしの問題ではなくて、いろんな生活条件と関わりあって教育や文化の問題も存在してると思いますけど、そこら辺のところを教えていただけますと。

前に僕も札幌学院大学の前身の札幌商科大学にちょっといたことがあるんです。あそこの大学の公開講座で、小川さんがアイヌの現状について報告してくれたのですが、そういった形でしか分かっていないんです。それを聞いてそうか、と思ったことはあるんです。秋辺さんがウタリ協会の教育文化における問題の責任者だっておっしゃっていましたので、その教育文化における問題や要求がありましたら教えて下さい。

**秋辺：**端的に言うと、日々生きているその生活の暮らしのその輪の中でね、例えば、教育って場面でいえば、小学校入学して、中学、高校と、行くのが当たり前になっていますが、そこでその学校教育の場でアイヌとしてそこに存在することができない。つまり、アイヌに関して教育する中身を持っていないから、

漠然と「あいつはアイヌだろう」とか、先生自身も「この子はアイヌなんだろうか」とかね、その子自身も「俺はアイヌなんだろうか、いやそんなことはない」と自己認識ができない状態に置かれている。その直接の原因は何かっていうと、教育の教科の中にアイヌのことが歴史的にほとんど登場しない、地域社会でもアイヌのことについて触れたがらない、というような状況になるわけですから、まさにこれはもう社会的な民族に対する隠蔽、これ以上の差別はないですね。

しかも私の教育文化部会でやっている仕事のかかなりの部分が教材の点検なんですよ。社会科の副読本がどういうものを使われているか、教科書にはアイヌのことがどのくらい記述されているか、その問題が指摘される度に出版社とやりあう。今そういう作業に追われているわけですし、この15日にも学習研究社、学研と二度目の交渉に入りますけれども、小学校5年生が使う道徳の副読本、この中にアイヌの物語が一つ出ていまして、これが最初から最後までほとんど差別的な表現だらけなんです。アイヌに対する評価なんてものは全くない。アイヌは未開だ、野蛮で、アイヌの文化っていうものは本当にひどいものと、そういう評価の副読本なんですね。

その教科書本体でも、その社会科の教科書に出てくる割合なんて、1ページ割くなんてことはまずなくてね、せいぜい何行かという程度ですから、それは教科書そのものの問題もさることながら、それを教えようとする先生も大学でそういう教育を受けていない。だから教育の場の中でアイヌの子供がいくら血をひいていても、アイデンティティーを持っていようがいまいが、そこに存在すること自体が非常にいびつな状況になっているわけですね。

私が今釧路に住んでいて、釧路でリムセ保存会、リムセってアイヌ語で踊りって意味ですけど、そういう名のアイヌの伝統的な踊り

を伝承するグループがあります。ここにいるのは大抵家庭の主婦でアイヌのおばちゃんたちなんだけれども、6年前に私が釧路へ帰って、その組織と一緒に活動し始めた時に、そのおばちゃんたちは外で踊る時になぜかサングラスをして踊るんですね。アイヌの衣装を着て踊っているのにサングラスをするわけですよ。釧路はそれほど日差しの強い地域じゃありませんしね、サングラスを必要とする程日照度が高い地域ではないわけですし、これはそうじゃなくてもサングラスというのはヨーロッパ的な欧米的なものでね、どっちかっていったら、少しかっこつける人とか、特別な人がつけるメガネという雰囲気がありますから、何でそんなサングラスをするのかなあと思ったら、まもなく理由がわかったんです。

その理由はアイヌの伝統的な歌や踊りを町の中で披露したりするとそれが新聞社、写真撮って新聞に載る、それからテレビに映る、そうすると家族がそれに反対するわけですね。そんなアイヌだなんてわかつちゃ困るから、子供が学校に行ってるし、孫も学校に行ってるし、そんなアイヌなんて顔をしてテレビに出てほしくない、新聞の写真に載ってほしくないからやめてくれというんでサングラスで顔を隠して踊っているわけですよ。

しかも、リムセ保存会の、アイヌの古式舞踊は、古いタイプの踊りだといって国の重要無形民俗文化財ということで、これは北海道の数ある伝統芸能の中ではアイヌのものだけが国の指定を受けている、まあ国が指定するという意味では一番レベルの高い指定を受けているんですね。国宝級なわけですよ。けれどもそういうエライものだから我々はそれを踊っているわけじゃないですね。やはり、自分の血が騒ぐし、それに出れば少しはお金にもなるということもあるし。それでみんなやっているんだけれども、そういう国の指定を受ける評価があろうとなかろうと、一般の

周りの人たちはそれをやっていればそういう国の無形文化財だから素晴らしいものだとは思わないんですね。アイヌがアイヌの踊りをやっていてね、観光地のようなことやっているのかなぐらいしか評価をしない。まあちょっと典型的な話をしましたけれど、日常生活の中でそういう具体的なことはいっぱいありますんで、また。

小林：やっぱり、そうですね。例えば子供の権利条約だとか、差別をなくそうとかいう動きがあるのですが、私はもっと具体的な日常の環境のところでどうかなあと思っていたのですが、そういうところでちゃんと出ちゃってるんですか。

井上：今のサングラスの話っていうのは実によく物語っているんじゃないですか。現実の差別というものを。

## 6 和人の文化の虚像、偽物の姿も沢山見えてくる

新原：私もメルッチさんも社会運動にそういうふうになんと関わってきた中で、いろいろと先程私たちが話していた様な事を少し説明したんですが、その事で自分がどうあるべきかということについてずっと今考えさせられてきた。その中でただおそらく自分の中に研究者としてどう運動に関わるのか、或いはそれを見るのかという面と、個々の一個の市民、人間として具体的にどんな社会的、政治的な行動を起こすということの二つが緊張関係を持っているといえます。

メルッチ：確かに私も一市民であるという責任は感じているし、その中で今申し上げた様な自分の中にある二つの面ということの緊張を感じています。ただその事とはまた別に、例えばこういう形でお話を伺うという時の持っている社会的な関係というのは、明らかに話を聞くだけでそれをなかなか変えていけないという面を持っているということもよく感じているのです。

ですから私は、調査や研究の方法として、お話を伺う方に何かを返すんだということを自覚的に追求しようとする。それは方法としてそういう形をとるのである、ということを強く感じています。実際、私は幾つもの運動に関わっております。一個人として関わっております。その中で私は様々な持っている知識や物の見かたで使える物があれば、アドバイスをしたり、実際にその運動で一緒に関わっている人たちが自分の事をどう考えているかという時に交換できるものがあればしています。

様々な運動の中で、とりわけ私が加わる時には、それぞれの運動のグループが、先ずとりわけ自分たちが何者であるかということを強く自覚してもらいたいと思っています。何故ならばそういう事をすれば、じゃあ何を求めたらいいのかということが、自分は何者であるかということのをうまく汲み取ることが出来るし、そこから具体的な要求が出てくるのではないかと思うからです。

だから私が社会学者として様々な社会運動に関わるにあたって一番大切だと思っていることは、別にお金を援助するとかそういうことではなくて、実際に関わっている人たちと様々な話をしたりする中で、その或るグループがどんなことを求めているのかということ、それぞれそのグループに参加している人たちが自覚していくようなプロセスに関わるということです。自分にとって重要なのは、何かを外から「こういうことをしなさい」と押しつけることではない。

**秋辺：**先程の話の続きでうちのおばちゃんたちは、ここ4、5年サングラスをしなくなりました。それは、やっぱりアイヌであるということの自己主張をし始めたということですね。それは正当な事で決して隠すべきことではない。勇気を持って自分の子供にも孫にもアイヌであることを、或いは歌ったり踊ったりすることについて、少し恐ろしいというか、

少し心配だけれども真正面から取り組まなければいけないって、そういう風が変わってきました。その場合、じゃあ何がそうさせたかと言うと、アイヌのその伝統的な歌や踊りが、決して未開なものではなくて、人間として当たり前に分かる自分の思いを表現するものなのであって、日本人の歌や踊りと比べて、何ら差別されるものでもなければ遜色あるものでもないと気づくということです。そういう歌や踊りに対する解説を通じて、「こういうものなんだよ」と知って行くこと、そのことがね、自分たちの歌や踊りに誇りを持ってくることになるんですね。一般社会では「アイヌ踊りか、“アーホイヤー”だべや」とかそんな具合の非常に無理解な無知識なそういうところがあるもんだから、それを払拭していく作業がとても大切なんですね。

**新原：**すいません。その解説というのは、

**秋辺：**それはね、実に日本人的な発想で解説するんですよ。

**新原：**わかりました。それは少し皮肉な面もありますね。それを含めて伝えます。

**メルッチ：**自分についていろいろと自覚すると同時に、他の、必ずしもそのアイヌ民族の問題というのは孤立した問題では無くて、他にも同じ様な問題を抱えた人がいるということを知るという形で知識を得るということが、単なる知識じゃ無くて直接に身体で分かるとか自分を知るということに繋がってくる場合がありますが、私はそれが非常に重要なのではないかと思います。また、そういう点に関わる科学のレベルには緊張関係があります。

**秋辺：**私はそもそも自らがアイヌ民族であるということに誇りを取り戻し始めた原因は、社会人になってからアイヌの伝統的な民具の評価を、これはアイヌのものというのは、着物でも彫物でも何でもアイヌ文化は非常に優れたものの一つである。決してそれは、未開のものでも野蛮なものでもない。そういう評価

を日本民芸運動という運動の中から知って初めて開眼したんです。それまではね、全くこういうものがないものだという評価は自分自身には無かった。周りにも無かったし、自分にも無かった。

**メルッチ**：先程、おっしゃっていましたが、ここですごくマス・メディアが発達して、いろいろと外の世界の情報というものが流れ込んできたりするというのは、問題となる面もあると同時にいい面もあるといえます。つまり、そこから逆に自分たちが何者であるかということを他の同じ様な状況を抱えた他者を知ることを通して知り、そして今まで自分たちだけで自分の事を考えていた状態から、少し同じ様な他者の声を聞いたり或いは他者の状況を察する事で自分を知るという状態に変化して行くということです。そんな具合にして今の自分を知る、他者を介して自分を知るという過程が今非常に大切なんだということを私は直観的に、学問のレベルで直観的に思っています。

**秋辺**：私の作業は、自分がアイヌであるという事実を自ら確認するという作業です。それが、アイヌの伝統的暮らしの中でもし私が埋まっていた、その中に暮らしていたんであれば、何の不思議もなく当たり前民具を受入れ、当たり前アイヌ語を喋り、当たり前アイヌの衣服を着ていたと思うんだけど、アイヌだというルーツを背負っているだけで日常の暮らしは日本人と何も変わらないわけだから、その中でアイヌであるという事実を自己認識するってのはこれ容易なことじゃないんですね。

私はその日本人というもの、或いは米を食っているとか、和服を着ているとか日本語というものを喋っているとか、そういう日本人というものを通して自分を見つめたわけです。アイヌがアイヌを通してみた訳じゃなくてアイヌでありながら日本人というものを通してアイヌを見てくるという、そういう

経過を辿っているんです。私は日本人として言葉も喋り、米の御飯も食べ、味噌汁も飲んでその日本文化に浸りきってきた。だから逆に、じゃあ昔アイヌは米を食ったんでなくて何を食ったのか。昔アイヌは和服を着ないで何を着ていたのか。その和人の文化とアイヌの文化と対比することで、私は自分を見つめてきたわけですね。

そうして行くうちに大変な事実を発見していくんですね。何を発見するかというとね、アイヌのことをあーだこーだ言ってもね、対比してすぐわかんないけどね、日本人として和人としてあった文化がね、今まで教えられてきた事や自分が感じてきたことは全然違うんじゃないかということです。和人の文化の虚像、偽物の姿も沢山見えてくるんです。これはね、喋るときりがないので、もう山ほどありますから後に回すとして。

人と人との関係がアイヌ民族の場合は、とりわけ和人と関係っていうのはぬきさしならない関係にあるんですね。決してアイヌだけが独立して和人とは何の関係もなくロシア人とも何の関係もなく、回りのどんな民衆とも何の関係もなく、アイヌだけが独立して全く孤立していたということは全然ないんです。ものの見事に関わりを持っていたんで、しかも和人とアイヌの関係は非常に濃密である事も分かってきたんです。その関係は歴史的にもそうだし文化的にもそうなのに、日本人側はこれらを学問の世界でも教育の世界でも一般生活の中でもひた隠しにするんですね。その事実も見えてきた。何故そういう風に隠したりするのか、或いはアイヌの文化について何故評価が正しくないのかという疑問を私は持つわけね。その疑問を探ろうとすることが、やはりこの「ヤイユーカラの森」の組織としてする仕事の一つでもあるんですね。

## 7 他者を通してしか自分のことは見えて来ない

メルッチ：今、お話になったことはすごく重要な意味があると思います。というのは、結局、人は他者を知ることを通してしか自分を知ることが出来ず、その時に「あの人はちょっと私とは違うんだ、異質だ」と思ってしまう。そういう場合には少なくともそのことを言える何かの関係が必ずある筈ですから、違うんだということと同時に関係があるんだということも見ておかないとならないと思います。つまり同じ土俵の上に乗っていて違うんだ、違うんだと言ってしまうことの意味を考えると、この行為が、おそらく自覚するということなのじゃないかと思います。そして、もちろんこれまでのそうした自覚の回路が断たれてきた歴史があったということも忘れてはならないでしょう。

秋辺：そういう意味では、1945年の大戦終結という、この50年が人間同士の様々な良好な関係を作っていくスタートになったと思います。しかしまだ熟してないですね。50年たったといえ、まだまだそれ以前の古い体質の学問も引きずっているし、古い体質の社会関係もまだ引きずっているから、始まったばかりだと思います。

私にとって嬉しいことは、例えば今日こうしてメルッチさんとお会いしたりとか、沢山の研究者とお会いした時のことを、釧路に帰って仲間に話したりすることです。やっぱり皆、嬉しいですね。「あーそうか。アイヌのことでいろんな人が訪ねてきたり、そして会ったりするんだな」というのは、何か分からないけど、俺もよく分からないけど、少し開けてきてるんだなというそういう意味での嬉しさを持っています。

そういうことが、しかし本当に確実に実っていくかどうかという点については少し冷静な眼を持たなくちゃいけないんです。そういう冷静な眼は計良さんがしっかり持っている

んで私はぼーっとなっても計良さんがしっかりしてるから大丈夫だ。

井上：計良さんはクールな和人ということですか。

秋辺：ぬきさしならないアイヌと和人の関係だからね。智子さんとも？

計良：それはもちろんぬきさしならないですよ。(笑)日本人を見ることによって、アイヌを見つめ直す視点を自分の中に作り上げてきたという話になりました。それは、確かに見ててそうであると思いますし、感じているんですけど、もう一つ、特に1970年代になって世界の先住民族の運動というのが盛んになってきた時に、アイヌも国内にいて沢山情報入ってきますから、外へ段々出ていくようになります。それを実践していたのが、やはり得平さんであり、「ヤイユーカー・アイヌ民族学会」というグループであり、「ウタリ協会」の一部であったんですね。

アイヌが海外に行って、海外の先住民に会う機会が1970年代に入って増えてきました。そうすると、特にお客様として海外の先住民の中に呼ばれた時は、アイヌとして出ていくわけですね。そうして、行った時はアイヌになるんですよ皆。国内ではどうであれその事がものすごく大きかったと思います。和人でありアイヌでもある自分になるという事態が生まれてきたといえます。アイヌ人の血を引いて生まれてきただけではアイヌにはなりきれない部分が沢山あります。それをどこかでアイヌになるということが一人一人の人間に必要なんですね。

それはメルッチさんの先程言われた「自分たち或いは自分は何者であるか」を自覚すること、確立することと全く重なるんです。けれども、それが海の外へ行って他の人と会った時にアイヌだって宣言したことによってアイヌになるんじゃないくて、日常生活の中で例えば、私とかみさんとの間の子供がアイヌになることを子供としていつ選んでいくか、そ



れを親はどう保証出来るのかということが親の役割であるし子供に対しての使命なわけですね。いつかは自覚しなければならない。いつかはアイヌにならなくちゃならない。これをまだまだ今の社会というのは保証しきれてない。これを私はものすごく必要な事だし、獲得しなければならない事だって思いますね。

メルッチ：おそらく今、国際先住民会議の様な形で1つの場所に様々な人たちが集まって来ることの意味というのは、今、計良さんお話になったような日常的に様々な葛藤や日々の決断を抱えている様な人たちがそのことの意味を確認したり、だから何かの報告をきっかけとして意味があるのであって、例えば会議に参加すれば何か全てうまくいくということではない。むしろ日常生活の中に大きなゆっくりとしか変化しないんだけどそれを自分の力で変えていくという場があるのであり、そうであってこそ初めて、或る一つの広場を作って皆が集まる事が意味を持つてくるのではないだろうかと思います。

計良：全くそのとおりです。

メルッチ：ですから、例えば私の様な人間がもし何か存在する意味があるとしたら、それは今日こうしてお話を伺ったのと同じように自分を知らうと考えている別の、例えばヨーロッパや他の場所にいる人たちに、それぞれが自分のことを知るために「けっして貴方の問題は特殊な問題じゃないんだ。しかもそれは日常的な問題であって大きな政治の問題というよりも、むしろ日々の小さな生活の中にあるんだ」と伝えていくのが自分の役割だと思います。

もう少し具体的に言うと、日常生活の中で先程おっしゃった様々な明らかな眼に見える差別もあれば、実際に見えない形での差別もあるということについて、知り合う場所とか他の同じ様な問題を抱えている人たちがどうやったのかを伝えあうということがあってい

いでしょう。

計良：まあ、先程の小林先生の質問の続きになるかと思うんですけど、現実アイヌが社会の中で、仕事の面で、例えば具体的に差別を受けるとか、そういう現象っていうのは数限り無くあるんですけどね。今の日本の社会の学歴偏重主義というか、いい仕事に就こう、つまり収入の安定した仕事に就こうとすればやっぱり、より高いレベルの教育を受けるといふ事が必要なのわけですね。ところが、北海道庁の調査によればアイヌの今の高校進学率っていうのはまだ60%台だし、大学進学率もまだ7%かそこらです。一般的には高校進学率はゆうに90%を越えているし、或いは大学進学率も30%越えているわけですから、その差は歴然としているわけで、その差は別にアイヌの子供は頭が悪いからではなくて、進学するための社会的、経済的な条件、家庭的な条件が揃っていないからなんであってね。

アイヌだからと言われるのを非常に嫌うわけですね。だから多分北海道大学に入学している人もいるかも知れないんだけど、自分の出身を隠す、敢えて言わないという行為も出ているんですね。むしろそういう所に行けば行くほど隠すという傾向になってきますね。折角立派な日本人になったわけですからアイヌなんか逆戻りしたくないという風に思う場合が多いのじゃないかな。

そういう高いレベルの教育を受けていないということで、職業的に安定した仕事に就けないという現象の他に、もう一つ重要なのは、じゃあ中学卒業した位で肉体労働等のあまり安定してない仕事に就いた人たちには何の問題も無いのかというと、これは全く実に多くの問題を抱えていて、むしろそういう所にこそ非常に直接的な差別が起きているという現象がありますね。

## 8 自分たちが何者であるかを知るための空間や場の確保

メルッチ：今までのお話で私は運動の目的、もしくは実現したいと思っている事が皆さんには少なくとも三つあるのではないかという風に理解しました。最初がまず平等な人権を獲得すること。二番目は同じように異質であり続けることの権利、これは自分たちの権利を確保すること、自分たちの歴史といったようなことを制度的に守られるようにするという要求であろうと思います。そして三番目として日常生活の中で、自分たちが何者であるかということを知るような場所、そういう空間や場を確保できるような事を制度的に保障することです。

そして今挙げた中でおそらく三番目が最も重要なのではないだろうかと思います。おそらく「ヤイユーカラの森」のような場所で実際にこのような民具を直に作ったり、教わったり、或いは此处に人が集まってきて話をしたり、一緒にいるというのは、この三番目にあたるのです。つまりこういう場所、空間があるということの持っている意味がすごく大きいのではないだろうかと思います。また、こういうものの見方とは対照的なのが古い社会運動の考え方ではないかと思っています。つまり、今、三つ挙げたうちの最初の二つを獲得すれば、三番目は自動的に出てくると思っているのが古い社会運動の考え方なのです。

計良：なるほど。

メルッチ：しかし私は、この三つはやはり一緒に歩調を合わせて同時にやっていかなくてはいけないんじゃないかと思っています。必ずこの三つは同時に行わなければならないものだと思います。

秋辺：私は釧路市に住んでいて、釧路市の教育委員会と色々子供たちの教育について話をしますが、話し合いの場を持つとすると事を避けるんですね。なかなか難しいです。それを、だから今後もっと開いて、彼らの考え方

を変えさせていく、我々の思いを伝えて要求をしていく為には、私たちと教育委員会だけの接触じゃなくて、もっと周りから社会的に影響を与えてくれることがとても大事な役割を持っています。とりわけ、その教育委員会のお役人等は専門家や研究者や学者には弱いですからね。皆さんの応援があると非常にありがたい。今までこんなことを話したことはないな。初めてだな。

まあ「ヤイユーカラの森」はその前身が「ヤイユーカラ・アイヌ民族学会」となっていて、これは今もあります。これはもう21年目の活動に入るんですけども、この21年を振り返ってみるとジャーナリストとの出会い、学者との出会い、新左翼の活動家との出会いなどいろいろとありましたが、まずそれらと出会っていろんな情報を得るということにほとんど時間を費やしてきたんですね。だから今の「ヤイユーカラの森」のような事業をやっているというのは、本当にここ近々のことでしてね。

今度、来年度、札幌に新設される高校の授業で、選択ではありますけれど、二単位獲得するアイヌの授業が採り入れられる事になりました。まあ、そういう新聞発表がありましたけど。それでもう、これはもう画期的な出来事です。これはやっぱり広げていきたいと思うしね。だから先生おっしゃた三つ目の日常生活の場、空間というものが教育の中にも必要なわけなんですね。

小林：あの一、メルッチさんは今日は大変お疲れなんでそろそろ……。もちろんまだいい方はどうぞこのまま続けていて下さい。私は一つだけ聞きたいんです。例えば、日本人は日本で生まれて、日本語を喋って、日本の和服着て……っていったら日本人なんですか。

秋辺：ええ。

小林：日本人って何なんだっていうと、その根拠はよく考えてみるとものすごく弱い。僕もそうなんですけど、ですから自己のアイデ

ンティティを他の人に言えない。そう、言えない筈ですよ。異質性という鏡を持たないんですから。日本人が自分探しをしていかなきゃいけない時にアイヌや在日朝鮮人や中国人やね、そういった人たちが助けてくれる。助けてもらわないと自己を自覚出来ない気がする。僕は小さい時から周りに在日朝鮮人とかたくさんいっぱいいましたから……。

秋辺：伊藤先生ですか。確か山形出身とおっしゃったですね。山形というと東北ですが、東北はアイヌ文化が非常に残っている所ですから、地元では隠すんですよ。割りにね。我々もよく知らなかったし、行ってみて初めてね、顔からしてもね「これは間違いなくアイヌだな」という人も沢山いるしね。郷土資料館なんか行ったら、アイヌの伝統的な衣服がどこか隅っこのほうにかかっていたりね。何処かでは意識してるようなんだけど、明確に自己認識はしていないみたいだな。だから東北地方の人なんか、やっぱりアイヌって何なのかということはそのまんま自分は何なのかに直結する筈なんですけど、その作業が非常に遅れているんですね。

伊藤：怖いですね。自分を暴かなきゃいけないのは。

## 9 アイヌもスケベですからご心配なく

秋辺：私なんかの立場からはもう明確にね、日本人ていうのは北ではやっぱりアイヌとの接触があったし、それから政治経済的には朝鮮半島、中国大陸との西の接触がありました。そして、南はやっぱり東南アジアへの侵略ですよ。今もジャバ行きさんとかいますしね。売春ツアーとかもありますね。とにかく歴史的には稲作文化を中心とする農業生産の文化の接触、そういう物の混合体として「日本人」というのは成り立ってきたというのは明確であると、私はそう感じとれるんだけど、どうも一般社会ではそういう認識が欠如して

いてですね、何か日本人というのは特別に単一民族で純粋培養されたみたいに自分では思っている。そういう節が教育の中にも濃厚にあるんですね。

小林：東京中心はおかしいと思うんですよ。言葉では「地方の時代」だと言っているけれど、やはり中央中心に考えている。そういう「地方の時代」を支える自分探しの精神がまだ日本人は十分熟してないと思っています。

秋辺：もしアイヌが、アイヌ文化がこのようにじゃまされないで、もしどっぷり私もアイヌ文化の中に浸かっていたら、アイヌって何なのかなってアイデンティティはもしかしたら見つかってなかったかもしれないですね。やっぱり仮面を付けさせられる事によってね、自分の仮面は剥がれてきちゃったという覚えがあるんです。和人はそういう点では自分を発見するのがなかなか大変だとは思いますよ。

小林：和人はカネに汚くて、セックスばかりを求めて……。

秋辺：いやいや、アイヌもスケベですからご心配なく。(笑)

小林：それから、年中差別しかしていないのに、全然その覚えの無い人間がいます。前、高校教師の時に差別の事件で日本史を私なりに組み立ててずっと教えたんです。それで大変しんどい質問が出ました。「先生、日本人ってこんなにいやらしい人間なの」って。「そうだ」、「そうだ」と言ってそれだけでいいのかと思いました。

計良：そうではないんですよ。

小林：はい。裏があります。裏っていうか、もう一枚下にヴェールがあります。

秋辺：歴史的なものは言うまでもなく、封建社会を千年以上くぐる中でね、それはやっぱり人が人を踏みつける様なそういう社会組織を日本人は、ずっと持ってきましたから、その意味ではほんといやらしいです。それは中世ヨーロッパでもそうだし、大体 1945 年以前

の地球上の人間社会っていうのはそうですね。

ただ日本人っていうのは、じゃあ元々そうなのかという決してそうじゃないし、縄文に立ち返るか、石器に立ち返ると、実にアイヌと良く似た暮らしをしていたんですね。そこ位まで立ち返らなければ、そこまで振り返らなければ、日本人の本来のその優しい姿を見ることが出来ないっていうのは、ちょっと時間的に遠いですね。その意味じゃ、日本人、自分の直接のルーツを省みると、明治政府ももちろん良くないことをいっぱいしているし、幕藩体制もとんでもないことばかりしていたし、やっぱりその意味で反省しなければならない歴史をより多く抱えていますね。

小林：はい。

秋辺：その分、便利さを今まで沢山あちこちから受け取ってきたんだから、便利さを受け取ってきたことのつけをね、今返さなきゃならない宿命を今の日本人たちは背負っているわけですからね。やっぱりその点を認識する必要があると思いますね。

小林：それを認識しますと、例えば女性が不利益になるだとか、いじめでもって子供が自殺するだとか、いっぱいありますよね、いろいろな話が。今の社会が内部に抱え込んでいる差別の問題は、一番おおもとの所では、アイヌや朝鮮人たちの差別を幾つもやってきた、という歴史を払拭していないから今もあるんですね。

秋辺：そうですね。一度きちっとした方がいいと思いますね。そうしないと学問の世界でもおっしゃる通り南を向いちゃって、足元のアイヌを見なかったとかね、そういうようなことがよく起こり得るわけですよ。だから、日本の文化人類学者たちは大抵オーストラリアとかニューギニアとか行くわけですね。これはやっぱり足元を見るべきなんですね、そういう意味じゃもう足元を見ていい時期にきていると思いますから、周りがそういう事をお

互い認識し合えばまあいいんじゃないかと思っていますね。

今から22年位前ですかね、日本人類学会と日本民族学会の連合大会が札幌であったんです。この時にもアイヌ解放運動を唱える、我々もまた別なグループで行ってて糾弾やったんですね。それ以来日本の人類学会、民族学会はアイヌはおっかないもんだと言ってねもう逃げ回っていたんですよ。これやっぱり学者と言えども別に強靱な心臓があって、何言われようと赤面もしないような厚顔無恥な人でもないわけで、ごく当たり前にそういう点では気の弱い人たちなわけですから。この二十何年間かってのは、日本の人類学会、民族学会ってのはやっぱり、しばらく後ろを振り返るということをしたくない。別な所を見て研究したいというそういう時代だったと思いますね。でも今、確実に変わってきましたから、やっぱりこの変わってきたという事実を大事にしないといけないと思いますけどね。

## 10 既成のフレームでアイヌをみてしまう怖さ

計良：小林先生が子供に聞かれた「日本人ってそんなにひどいのか」という質問にどういう風にお答えになったかは分かりませんが、一人の人間が、例えば私にしても日本人の全てを持っているわけではないんですね。確かにいろんな悪い事はやってるけど、それを一人の人間なり、今の人間が全てを背負って、一人一人が全て日本人を代表できるのかというところではないんだということがあります。もちろんそういう部分も歴史的にはあったからそうではない社会を作らなければならないということですけどね。

同じことがアイヌについても、20年以上も前からマスコミ、研究者、市民運動家、いろんな人がアイヌに関わってくるようになりました。それは、一つはアイヌってものを知らないから知りたい、そのことが何処かでアイ

ヌに点いての一定の概念を持ちたいという形で入ってくる、知識を得ることで、一定の概念が出来るとそれが絶対になるわけです。ところがそれがアイヌの全てではないんだという、その点が抜けるんですね。

宮内：去年のマスコミ学会が札幌で行われたんですよ。野村さんが特別講演でお話されたんですけど、大体始まって数分で2/3の方が帰られました。

計良：へえー。何ですか。マスコミ関係の参加者ですか。

宮内：いや、その学会の会員の方ですね。

計良：聞かなくても分かる話をしたからですか。

宮内：大体そうです。頭で、それはもう歴史とか、テレビとかで分かっているということで帰られた、と僕は思っていますけど。

計良：そうですね。それは野村さんの話があまり面白くなかったんじゃないですか。

秋辺：人を引きつける話じゃなく、それはジャーナリストというかマスコミ学会相手にするっていうくらいだからかな。

計良：一定の既成の概念が出来ちゃうと、アイヌってのはそれなんだって一人一人の人が思い込むんですよ。そうすると違う意見を言ったり、違う生き方をしたり、違う事を考えたりしている人がアイヌじゃなくなるんです。その人にとって、そういう人が一定数以上に増えてきたのが今の社会じゃないかなと思います。これはやっぱり正されなければいけない。いろんなアイヌがいて、いろんな考え方があって、なおかつそれでアイヌなんだ。日本人ってのをあなたが全て背負ってるんだって事にはならない様に、アイヌだってその筈なんだと思うんですね。

井上：全部一人で背負いこんじゃったら困ると思いますね。むしろ、アイヌを過剰に美化してしまうとか、何か堅固なフレームが出来てしまっていることが問題でしょうね。その枠の中で新しい差別が作られているという状

況が批判されなければならない。

計良：既成の概念ってすごく楽なんですよ。そういうフレームの人にはアイヌってのはアイヌ人なんだし、いつまでたってもその人にとってのアイヌのイメージは変わらない。

メルッチ：今の話に全く同感で、じゃ実際にどんな迫害を受けたかとか、差別されたかとか、圧迫されたかという歴史それ自体の問題も大きいですが、今の社会の中でもっと危険なのはいろいろな偏見や、今、計良さんがおっしゃった様なある既成のレッテルの様なものが一人歩きしてしまった場合です。これはむしろ日常生活の中で機能して、例えば職場と一緒に仕事している時に相手に恐怖感を持ったりとか、或いは軽蔑したりとか、そういうことを無意識のうちにやっちゃっていることでしょう。

そういうものが日常的に無意識のうちに蓄積されてる自分を知らない限り、そうした気が付かないうちに自分の中に出来てしまった様々な誤ったものの見方をなかなか変えられない。これはおそらく非常に現在の、今の問題として気を付けなければならない問題であると考えています。

今まさに、誰もがこの学生をどうやって守っていくかをこうやって考えなければならない時に、こうした互いの中にある偏見や、本当によくある、せっかく他者が自分たちの側にいるのに本当にその人がどんな人なのかというのが分からないままに距離を置いたり、或いは短く付き合ったりしている。そのことに敢えて気づくという状況を作ることを考えなければいけないでしょう。

## 11 日本の先生方の顔が能面みたいに思えてならない

井上：このへんで田沢さんや山下さんにもしゃべっていただいてはいかがでしょうか。

計良：田沢さん、御指名です。

田沢：今までずっと聞いていてメルッチさん

の方の聞きたいこととかは大体予想つくんですけど日本の先生方の顔が能面みたいに思えてならないんですよ。不気味なんです。本当はメルッチさん抜きにして本音を聞きたいんです。そういう感じで今日出席させてもらったんでメルッチさんよりも他の先生方が何を考え何を希望しているのか聞いてみたい。

小林：今日はメルッチさんが主役だから、質問が途切れた時だけ我々が質問すると始めから決めてあったんです。僕たちはまた来るという事を前提に……。

井上：またこういう場を設けます。是非近いうちに。

小林：こうやってまとまって来るか個人で来るかは別ですが。

田沢：私たちはイタリアのことを知らないし、自分たち日本のこともあまり知らないけれども先生方は自分の知りたいこと、興味のあることにすごく積極的なんですね。多分メルッチさんも自分の仕事、政治的な活動とかそういうことは抜きにして、自分の知りたいことには貪欲になるだろうし、私たちも自分の知りたいことはすごく貪欲になる。ただそれの一番おっかないのは、自分は知っただけでいい、後は関係無いとなることです。それはいい面でいけばいいけど、悪い面で結び付いた時のことが気になる。日本の学者が過去それをやってきたから。やはり一番おっかないことですね。それが。

今、得平さんの意見は得平さんの意見ですが、ただあくまでも得平さんの意見でアイヌ全体の意見ではないし、いろいろな考えがあるわけだし、計良さんの意見だってあるし、これがアイヌの意見の全てであるという様な考えを持たれては困る。アイヌ自身も自分の都合のいいように考えている。私も自分の都合のいいように答える部分も出てくると思うし、だから得平さんは得平さんであって、アイヌの為を思って言ったことでも他のアイヌには都合の悪いことが出てくるかも知れな

い。それはもう綺麗事じゃないから。

だからイタリアの先生が聞きたいことは、得平さんに聞きたいのか、得平さんは始めから個人としてではなく、組織的な運動の中の人としてしゃべっている。現状がこうこうだとね。でも出来るだけ個人の意見を聞くべきと思うんで、だからそれ自体がアイヌ全体の意見ではないよ、全てではないよって考えて欲しい。

あと、アイヌ自身よりも此処に来てる日本の先生の方が仮面を被っている。本当に文化的なものや歴史的なものについては私たちより知っている部分ってのはすごく多いと思うんですね。知る機会もあるし、無いなんてのは真っ赤な嘘ですね。北大なんかではうんと資料がある筈だから。だからよく先生方が都合悪くなると、大学の先生は分からないですけど、中学、小学、高校の先生方ってのは、都合悪くなると資料が無い、知る機会が無い、会う機会が無いというんです。けれども、アイヌは会おうと思えば何処でも会えるし、知ろうと思えば何処にでも資料はある。

アイヌ自身が偏ってきているという部分は沢山あると思うんですけどまるっきり知らないところから、私は計良さんとか得平さんたちに聞きながら自分のルーツを調べながらアイヌとしてのアイデンティティを組織しています。得平さんは、さっき日本人としてアイヌを知っていたと言いましたけれど、私の場合は元々アイヌであり、アイヌとしてアイヌを知っていたということです。それでも実はアイヌでありながらアイヌを知らなくて日本人のことも大して分からない。なんて言うか、得平さんとちょっとニュアンスが違うんですね。活動の仕方がまるっきり違うように。

だからアイヌでありながら自分のことを何も知らなかった。日本のことは知ってるかと言うと何も知らない。日本人の目で見ているんじゃないで、自分の知識でアイヌと分かっている部分があってそういう文化とか歴史と

か知らない部分が多分にあるというアイヌなんです。何て言ったらいいのか難しいな。比較するものがなかった。まあ他の、北海道で言えば、先生方は今日、二風谷行って来たらしいですけども、そういうことを知らなかったんです。まるっきり。観光地とかそういうのが「アイヌの生活」っていうような感じで、同じ日本人みたいな感じでいて、アイヌの生活ってのはそういうとこなんだっていうのがすごく強くて、自分たちの住んでいた所はアイヌ部落っていうのではなくて、なんて言ったらいいのか、小さい時からただアイヌっていうだけの生活で差別だとか意識しないですんだ部分、自分はアイヌだと言ってえるんだよね。

だから、運動っていうかスローガン掲げて、アイヌはすごく差別をされてる、されてるっていうような感じで逆に自分にプレッシャーかけている。つまり私は入り方が得平さんとは少し違うんで、自分が元々アイヌだっていうのをすごく分かっているんです。アイヌはそこまですごく差別されたんだ、強いられたんだっていうのは逆にこの運動に関わりを持って初めて分かった。

だからなおさら、自分の生き方を変えたくないし、自分の祖先を（墓から？）引き出されたくない。自分の子供に誇りを持ちたいし、祖先にも誇りを持ちたい。アイヌであることのアイデンティティというのは未だはっきりしないけど、自分の誇りは絶対守りたいと思うんです。子供には何かを残したい。計良さんがさっき言ったように子供はどっちを選ぶかは本人次第です。子供はアイヌであるかないかということを自分でこれから選んで行くんだろうけれども、選ぶ選ばないに関わりなくアイヌであることには変わらない。

あいの子であろうが何であろうが、アイヌであることには変わらない。それが学校教育の中で教えて授業の中でアイヌ教育しなくても、それは自らやっていかなくてはと思う。

得平さんたちのように教育の場で直接関わっていかねばいけない人は、本当はもっともっといなければならぬし、また親たちが誇りを持てるような活動ってのももっともっとしなければいけない。今、親がアイヌであるという事実には誇りを持ってないという人が多いから、だから地域社会ばかりでなくてアイヌ自身の中に問題を抱えていく。逆に活動が進むっていうか、公になればなるほどアイヌ自身のやってることを、自己反省したり、いろんなことを考えさせられたり……。上手くまとめられないんだけど。

## 12 縁日が立っただって行きませんよ、私の子供は

秋辺：あの一。田沢さんの育った所というかその辺のことを説明しなければわかりにくいと思うんですけど。稚内に近い豊富町という所の稚咲内という地区があるんですよ。これは海辺なんですけれども、此処は大半が樺太アイヌなんです。それは1945年の終戦によって、それから2年後くらいに樺太アイヌも日本人という理由で日本に帰国させられるわけですね。ソ連政府によってね。函館に上陸して、さあ樺太アイヌは何処に行ったらいいか、故郷は樺太なのに日本人だからという理由で北海道へ帰ることになったんです。それで田沢さんのお父さん、おばあちゃんたちは北海道内を転々とするんですよ。自分たちの親戚の家を訪ねて、そこに住まわせてくれないかと頼むわけですよ。函館にも居た、小樽にも居た、日高にも居た、釧路にも居た、けれども結局は何処に行っても自分の落ち着く所が無い。それで、豊富町の稚咲内っていう所に仲間が集まっているらしい、ニシンもとれるらしいという情報を聞いて、そこへ5年10年の間に皆集まってしまうんですよ。そこで彼は育ってきたんです。だから彼にとっては樺太出身の二世ではあるものの樺太のことは何にも知らない。自分は稚咲内っていう

地区で、そこに暮らしているのが当たり前だと思って生きているから、圧倒的にアイヌが多いからアイヌが少ない所で受ける差別とはまた違う形なんですね。

私の場合どうかというと、私は釧路という所の大きな10万、今も20万越える大きな都市ですから、その中に居ますから、圧倒的な和人の中に暮らしている為に、目茶苦茶に子供の頃から差別を受けるわけですね。これはもう状況が全然違うんですね。で、それぞれが高校を卒業して、それぞれが技術を身に着け社会に出て初めて、私がさっき言ったように私の体験では、社会に出て初めてそれまで全く後ろ向きであった、もう僕は釧路に育ってアイヌといえば全て後ろ向きのことでしかなかったんです。でも田沢さんの場合は後ろ向きでも前向きでもない、そこは当たり前の場所であったから。

これと良く似ているのが、今日皆さんが行かれた二風谷の場合です。あそこは8割がアイヌですから小さい頃には、そういうのが当たり前ですから直接的な差別っていうのは無いんですね。ただ中学生になって平取町本町に行くと和人が圧倒的に多くなるから猛烈な差別を受けるんですよ。そういう事情から幼い時に何処で育ったか、その地域はどういう特徴であったかによって同じアイヌであるというルーツを持ちながら、全く体験が違うんです。社会に出る事によって今度は共通する体験をするんです。そういう意味で田沢さんは私とは発想はそこで、体験の違いによって発想が違って来るんですよ。ただ、私がさっきから述べている歴史的な事実であるとか、或いはアイヌの文化とは何か、これは共通するわけですから、お互いに納得出来るんですね。

問題は何かと言うと、やっぱり田沢さんは自分の子供が今後どうやっていくんであるかということでしょう。私も自分の子供が今後、どうなっていくんだろうかと思います。

それはお互いにまだ分からないですね。計良さんの場合もそうだけれども。ただ非常に明確なことは、もし僕が言え、それは田沢さんとは考え方が違うかも知れないし、得平がそういうことが全てアイヌの考え方ではないって言うかもしれないし、言わないかもしれない。非常に明確な事実として私の子供も田沢さんの子供も計良さんの子供もお互いに和人との結婚ですから、そういう意味では全く単純に混血しているんですね。その子供が自らのアイデンティティを何処に置くか、選び取ると言ってもじゃあ、和人がアイデンティティを選び取るそういう状況があるのかということです。ないんですね。

例えば、私の子供の場合で言いますと、今札幌に住んでいます。一時は釧路とかにいましたけど、大半は札幌で育ちました。札幌にいて和人社会にどっぷり浸かっていたかというところじゃないんですね。例えば、子供が北海道神宮の祭にいつも浴衣を着て、団扇を持って私は日本人です、という顔をしてお参りしたことがあるか、一度もありません。私がさせませんから。北海道神宮ってのは、北海道侵略の神社の総元締めですからね。親が行きませんから。もちろん、私のかみさんは広島県出身の和人ですけど、私がそう言うから神社に行きません。そうすると祭り事というのは、そこでもう縁が切れているんですよ。縁日が立ったらって行きませんよ、私の子供は。田沢さんの所は分からない。計良さんの所は多分行かないんじゃないかなと思うね。

それは明らかに親が和人文化の全てを受け入れるという意識が無いですから。僕なんかは願わくばアイヌの文化を受け入れて欲しいと思っていますからね。自分の子供にはアイヌ語に由来する名前を付けましたから。今も二番目の娘が、牧野航空旅行っていう所に勤めています。別にアイヌのことを何もやっていませんが、自分の名前は「アシリ」という



名前です。片仮名で付いてます。「アシリ」というと札幌の地名で「アシリベツ」ってのがあるし、自分の会社が今度ゴルフコンペするそうです。なんかカントリークラブに行ったらですね、アシリコース、ピリカコースってあるんですよ。そうすると、会社の人間が「成田さん、アシリってあるよ、アシリってあるよ」って言うんだそうです。「そうでしょ。それ、私の名前だから、アイヌ語で新しいっていう意味なんだよ」っていうように会社では私の娘のアシリに対してはアイヌ語の名前を持つお父さんがアイヌであるという事実を認識しているんですよ。そうするとこの子はね、自分は母親が日本人だし、自分はアイヌのことなんて知らない。それで「私は日本人です」と彼女は言い切るか、これは言い切りませんね。これはやっぱり、かなりの気持ちの部分で自分のルーツはアイヌにあると認識していると思います。

だけど、さりとて私の娘はアイヌ文化の中に今後、自分のルーツを置いてそこに邁進するかと言ったら、これは何の目標も無いし、分からないですね。逆にじゃあ和人かというとかみさんなんかそうですけど、彼女の場合、北海道に来てもう長いこと暮らしているわけで、ルーツは広島県にあるわけなんですけれども、彼女のアイデンティティはもちろん、日本人でしょう。だからといって自分の子供が父親から血を受け継いでアイヌだっというアイデンティティを持つとしたら、彼女との関係はどうなるかというと、正にそれはそういう日本人であるかみさんとアイヌである私と結婚して子供が出来てその子供が、どっちに付くか付かないかという、どっちを選び取るか選ばないかそういう状況の中にある日本人なのであって、全然不思議ではない。何が何でもどっちかを100%受け取らなければ人間じゃないということはないですから。

それで、よくよく考えてみますと今の時

代ってのはそういうアイデンティティも何処にルーツを持つかについても、非常に宙ぶらりんなんです。曖昧なことにするのも一つのスタイルであるんですね。そう思っている人もいるだろうしね、それは別にさほど大きな問題ではないと受け取ってる人も多い。非常に問題なのは、むしろ明確にアイヌとしての文化を潰すわけにはいかない、是非取り戻したいという思いがあります。何故ならば「へえー、こんな考え方があったのか」とか「こういうアイヌの思想があったのか」とか、これはやっぱりこの世から無くすべきじゃないって思いがあるから頑張るんであって、ルーツだからとか、そこにアイデンティティがあるから、何が何でもそこに持ってこなきゃいけないんだっていう理由じゃないんです。優れたものを持っているから、それを欲しいわけなんでね。全然くだらないものだと思ったら欲しいとは思わないですよ。

小林：このへんでお二人には先に帰ってもらいたいんだけど。

新原：メルッチさんは明日の報告もありますしね。

計良：ここは自分の意志でということをモットーにしていますから、自分の意志で来て自分の意志で帰って頂くことには何も問題はありません。

(以下 省略)

(付記) この座談会のテープ起こし作業は、私のゼミの学生、芋田淳、工藤利哉の両君が担当してくれた。その労をねぎらいたい。テープ起こし原稿には、秋辺、計良、小林の三氏には直接、眼を通していただいた。全体についての編集責任は、井上にある。

本稿は、1994年度文部省科学研究費一般研究(C)「高度情報化社会における名誉・羞恥感情の変容に関する知識社会学的研究」(研究代表者 井上芳保)の成果の一部である。

(井上 記)

【訳者解説 ― 講演の翻訳を終え、座談会を振り返って】

今回の講演は、メルッチ教授の「新しい社会運動」論の主張が非常によくわかる内容であった。Nomads of the Present の冒頭にもある社会運動論の二潮流に対する批判的検討から始まり、「私は誰なのか」と問い直す契機を持ち続けることの重要性が指摘されている。タイトルを「社会運動を政治にのみ還元してはならない」としたが、これは講演の中でメルッチ教授が自らの失敗の体験を率直に語っているのに敬意を表してのものである。

特に前日に出会ったアイヌ問題に言及している点が注目される。初めての来日であるにもかかわらず、北海道という土地の日本国内における特異な位置をいち早く認識して話を展開された点に私はメルッチ教授の状況倫理と感受性の鋭さを感じた。我々がここ北海道で経験していることは「より一般的な地球的な規模で起きている問題の一つの恰好の事例」(181頁)だとメルッチ教授は言う。「私は誰なのか?」というシステム社会状況において重要な問いは、一般的な事柄としてではなく、例えば、アイヌという少数民族差別という問題を想定して受けとめたときに俄に現実的な重みを感じさせるものとなる。

座談会の中でメルッチ教授は、「ヤイユーカラの森」の運動の目標は三つあるのではと指摘している。すなわち「最初がまず平等な人権を獲得すること、二番目は同じように異質であり続けることの権利、これは自分たちの権利を確保すること、自分たちの歴史といったようなこと制度的に守られるようにするという要求であろうと思います。そして三番目として日常生活の中で、自分たちが何者であるかということを知るような空間や場所を確保できるようなことを制度的に保障することです」(201頁)。そして、このうちの第三が最も重要と指摘した。この第三点は確かにこれまで差別問題を考える際に軽んじられてきたと思われる。この発言を聞いた時、私はメルッ

チ教授の「新しい社会運動」論の主張が具体的な現実を前にして効力を発揮する場面に立ち会った気がした。

「日常生活の中で、自分たちが何者であるかということを知る」には、異質な者同士がコミュニケーションを通してお互いにもっと分かり合おうとする努力が必要だろう。討論の意義は討論すること自体に含まれている。メルッチ教授は講演の最初で「討論とは問うべき問題点が何かを探ること」(175頁)だと述べている。異質な存在と積極的に交流を重ねていく努力は教育の場などでもっとなされねばならない。他者の生活が見えれば、何が問題なのかも自ずと明らかになるはずである。例えば、私には座談会の中で「アイヌもスケベですからご心配なく」という秋辺さんの言葉が妙に印象に残っている。差別にとってやっかいなのは或るフレームで人間を捉えてそこに虚構の「現実」を作ってしまうがちな我々の習性であろう。過剰な美化もまた差別の一部なのである。社会運動をする人々の多様性、差異性、複雑性というものから眼をそらしてはならないというメルッチ教授の指摘がここでも想起されてくる。

講演の終わりの方にある「システムが著しく分化して、たいへんすばやく変化し、我々が使用できるよりも多くの資源を供給してしまう」(182頁)という情報社会についての言及も興味深い。このような複合的な社会であればこそ、特に「問うべき問題点が何かを探す」種類の討論が必要となるのだと思われる。この点に関わっては、Nomads of the Present の中で「ジレンマの克服というよりも維持せよ」と述べていたことも私には想起される。ジレンマの中に身を置く受苦の状態においてこそ、人は本当にやさしくなれるではないか。それは、呪力剥奪された近代人がすっかり見失っている人間観であろう。

受苦の状態とは何であろうか。「我々は自分が誰なのかけっして正確には知りません。我々はいつもこの問いに対する答えを探して

いるのです」(182頁)という言及はそれへの答えを含んでいるようにも思われる。例えば「アイヌ問題」をいわゆる「アイヌ問題」としてのみ捉え、差別を他人事としてしまう傍観者の態度の社会学によってはけっして見えてこないものがある。どんなに精緻に「アイヌ問題」を社会的に分析してみても、相手の痛みを分かち合う姿勢がなければ、それによって自分自身を掘り返す覚悟がなければ虚しいのではないだろうか。それはやはり学問という名を借りた搾取なのだから。

その意味では、座談会の中で田沢さんが恨みを込めて「日本の先生方の顔が能面みたいだに思えてならないんですよ」(205頁)と述べていたことを我々は肝に銘じなければならない。過去の一部の人類学者にとってアイヌとは、学問的な好奇心を満たす「対象」でしかなかった。今、社会学をする者が同じ過ちをすることは断じて許されない。アイデンティティの不確実性を基軸に展開されるメルッチ教授の社会理論は自己省察する主体を前提として初めて本領を発揮すると思われてならない。情報資本主義下の匿名化した権力の姿を暴くためには専ら「対象」として人間を捉えてしまう自分を先ず暴かねばならない。私見では、例えばマーク・ポスターが、データベースという現象の中のパノプティコン（一望監視権力）を問題視するのはこの論点と関わっている。その意味で「ジレンマを維持せよ」とは、社会情報学へのティーチインとしても不可欠なメッセージといえる。

座談会参加者の一人が在日朝鮮人のことに言及していたが、アイヌ問題に限らず、いわゆる差別問題は多い。フェミニズム、同性愛者解放運動、「障害」者解放運動等々。それらの個々のあり方はそれぞれ個性的である。社会学者として問題と真摯に関わろうとすれば、それに関わる際の自分暴きは避けて通れなくなる。というより、いいかげんに関わろうとすると手痛いしっぺ返しが待ち受けている。そして、興味深いことにメルッチ教授は

Nomads of the Present では、むしろそのような事態、しっぺ返しを受けて心の痛みを感じずる事態の出現に最終的な希望を託す立場をとる。講演の中でも、社会運動が「単一性(unity)に還元されない」ものであることは繰り返し述べられていた。ルサンチマンの力を体感した人なら、社会運動は「単一性」どころではないと痛感するだろう。例えば、「やさしさ」が価値的となった近年、甚だ評判のよくない糾弾会にはそういう効果がある。

身体の深層構造に関わる発言も注目される。私の理解するところでは、Nomads of the Present の理論構成が、多くのポストモダンの論客と著しく異なっていて面白いのは、単に記号的なものとしてではなく、生理的なものも含めた全体的なものとして「身体」を扱っている点、そして「使用できるよりも多くの資源を供給してしまう」情報社会に抵抗する最終的な拠り所を東洋的英知と近い地点に求めようとしている点であった。その観点からすると「このポスト産業社会的意識は現代的システムの根本的な矛盾と関わらざるをえません。一面では、それは個々人に自律、自己決定、自己反省という資源を供給しています。ですが他面では、それは個々人を最奥の深層領域におよぼす制御へと送り込むものでもあります」(181頁)とは、なかなか意味深長な言葉であると思われる。

ともあれ、我々がこれから取り組むべき問題の大きさを痛感させてくれた講演と座談会であったといえよう。これを機会にさらに多くの方々がメルッチ社会学の魅力を知って下さることを願って今回はひとまず稿を閉じたい。

(井上 芳保)